



第6準備書面 要旨陳述

弁護士 永田 真衣子

テニアン島のビーチ

1

第六準備書面の概要

前半	後半
日本政府の低レベル放射性廃棄物投棄計画 ロンドン議定書締結までの歴史	テニアン島元議員 ワニータ・マスガ・メンディオラ氏のスピーチ
<ul style="list-style-type: none">・日本政府の低レベル放射性廃棄物の深海底投棄の計画・太平洋諸国の低レベル放射性廃棄物の深海底投棄に対する反対・すべての放射性物質の海洋投棄を禁止した、ロンドン議定書の締結に至る経緯	<ul style="list-style-type: none">・太平洋へのALPS汚染処理水投棄への反対・テニアン島の人々と海との文化的な関係性について・太平洋諸国の声に耳を傾けてほしいとの切実な要望

2

2

ALPS処理汚染水の投棄に反対した太平洋諸国フォーラム

太平洋島嶼フォーラムとは

- 太平洋の独立国および自治政府を対象にした地域経済協力機構
- ALPS 処理汚染水の海洋投棄に異議を唱え、専門家パネルを設立して日本政府と粘り強く交渉した（甲 8 号証等）
- 第二次世界大戦後、太平洋では、核大国による核実験が繰り返され、太平洋島嶼諸国の中で、自ら核実験問題を討議できるような地域的な政治フォーラムを設立しようという機運が高まり、1971年に設立

Communique of the 52nd Pacific Islands Leaders Forum, 2023

Leaders' Communiques

09 November 2023



核による海洋汚染の問題は、太平洋諸国の大きな関心事項である

3

3

ロンドン条約及びロンドン議定書締結に至る歴史

1976年 日本政府の低レベル放射性廃棄物の深海底投棄の計画

日本政府・原子力委員会「放射性廃棄物対策について」という基本方針を決定
低レベル放射性廃棄物については、海洋処分と陸地処分をあわせ行う方針とした。

1980年 ロンドン条約の批准

1972年12月29日に採択され、1975年8月に、ロンドン条約は、15カ国の批准により発効した。日本政府は、1980年11月14日に、同条約を批准した。

1981年 日本政府による放射性廃棄物投棄

1976年の時点で、すでに第一段階を実施しており、第二段階を1981年に開始するにあたり、1980年ころ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、および投棄地点に近いミクロネシアの島嶼に通告。

4

4

ロンドン条約締結に至る歴史

1980年代 太平洋諸外国をはじめとした各国の反対

- 1980年 太平洋ベースン首脳会議 一定期間の投棄計画中止を要求する共同声明が採択
- 1981年 南太平洋会議 放射性廃棄物の投棄計画の破棄を求める決議を採択
- 1983年 第7回ロンドン条約締約国協議会議 各国からの反対
- 1985年 中曽根康弘首相は、戦後初めて南太平洋地域を公式訪問

↓

公式訪問に先立って、放射性廃棄物の海洋投棄計画を無期限停止することを発表。
中曽根首相は太平洋島嶼諸国の反対を重視したと説明した。

1993年 ロンドン条約締約国会議で海洋投棄の全面禁止が決議

放射性廃棄物は、低レベルのものであっても、海洋投棄を全面的に禁止する旨の決議が採択
「低レベル放射性廃棄物処分の今後の考え方について」と称する原子力委員会決定

1996年 ロンドン議定書の締結

5

5

低レベル放射性廃棄物処分についての日本政府の方針

1980年代 太平洋諸外国をはじめとした各国の反対を受け、その意見を尊重し、放射性廃棄物の海洋投棄計画を無期限停止

★「低レベル放射性廃棄物処分の今後の考え方について」と称する原子力委員会決定では、

「海洋投棄については、国際協調の観点から、関係国の懸念を無視して強行はしないとの考えの下に、その実施については慎重に対処することとしており、現実には行われていない。また、地球環境問題への国際的な関心を背景とした関係諸国の懸念の高まりに加え、旧ソ連及びロシアにより国際的合意に反して行われた一連の海洋投棄による内外への影響等を考慮すれば、我が国の低レベル放射性廃棄物の海洋投棄の実施は、政治的、社会的見地から今や極めて困難と言わざるを得ない」と結論付けた。

そのうえで、低レベル放射性廃棄物については、地中埋設を進めるものとし、「我が国としては、今後、低レベル放射性廃棄物の処分の方針として、海洋投棄は選択肢としないものとする。」

6

6

ワニータ・マスガ・メンディオラ氏の訪日とスピーチ

令和6年9月2日、テニアン島元議員であり、太平洋自治体評議会連合副会長、テニアン女性協会暫定CEO、北マリアナ諸島自治連邦区第23議会ジュリー・A・オゴ下院議員事務所の公共政策アナリストの肩書を持つ、**ワニータ・マスガ・メンディオラ氏**が訪日し、ALPS処理汚染水の海洋投棄に反対する太平洋の人々の意見を説明した。

ワニータ氏の父は、1980年代に、日本の低レベル放射性廃棄物の投棄に反対し、その計画の阻止に尽力した人物である。



7

7

テニアン島

- テニアン島は、北マリアナ諸島の島の一つで、サイパン島からは約8kmの距離にあります。
- 現在はアメリカ合衆国の自治領
- 長崎と広島に投下された原子爆弾は、テニアン島に保管され、ここから運ばれたという歴史があります。



8

8



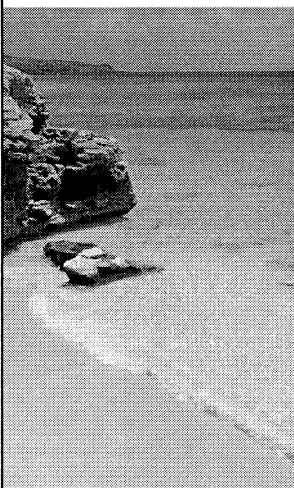
海洋投棄への反対

“私たちの海と生活の運命は、破壊と保全の天秤にかかっています。核廃液を太平洋に投棄するという行為は、単に日本の海岸や人々への脅威というだけでなく、原子力発電所の建設や核廃棄物の収集、そして原子力の汚染をもたらす事故とは無関係だった北マリアナ諸島連邦の私たちの幸福を直接攻撃するものです。”

9

9

放射性廃棄物を海洋投棄することの危険性



“このような行為がもたらす潜在的な結果は、破滅的かつ不可逆的であり、日本の海洋境界線をはるかに超えて、私たちアジア太平洋地域社会が食料、健康、そして一般的な幸福のために依存している太平洋のデリケートな生態系や貴重な資源に影響を及ぼします。”

“日本政府と東京電力は、今後30年以上にわたって何百万トンもの放射性廃水を太平洋に投棄し続けても安全だと主張しています。この決定は、太平洋を横切る汚染物質の流れに影響を与える気候力学の影響を受けた海流を無視しています。北マリアナ諸島は北、南、西、東太平洋地域のちょうど入り口に位置しているのです！”

10

10

トリチウムの投棄について

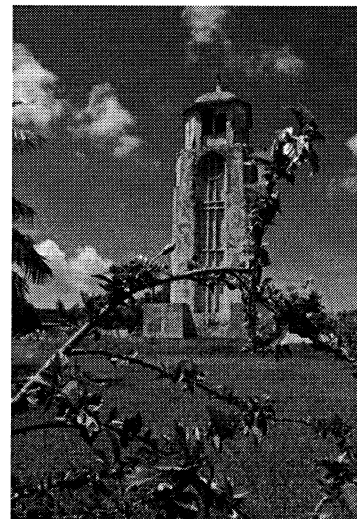
“母なる自然に逆らって、危険な元素を自然で安全な環境に添加し、罪のない人々を故意に危険にさらすことで、自然のトリチウムの含有量を変化させようとする試みは、最悪の人権侵害のひとつである。私たちの最大の疑問は、なぜ日本政府は、いわゆる「安全な」容器にトリチウムを埋め、その余命のためにコンクリートで覆っておくという選択肢を選ばなかったのだろうか？ということです。”

11

11

海と人格との結びつき

“北マリアナ諸島の人々にとって、海は神聖なものであり、私たちのアイデンティティと人間としての存在の本質的な要素であることをご理解ください。私たちは海を見たり、嗅いだり、聞いたり、食べたりするだけでなく、感じているのです。海は私たちの中で生き、呼吸している。私たちは海と深く結びついており、海は私たちの人間としてのアイデンティティを象徴しているのです。”



12

12

海と人格との結びつき

“トリチウムの脅威を理解するための調査中に、脅威のひとつはストレスであるという記事を読んだことを覚えています。私たちの生命の源から切り離されるような危害を認識することによって引き起こされるストレスは、感情的・精神的な障害につながります。この脅威だけでも、私たちの平和な存在を崩壊させるためには十分なものです。海との断絶は、私たちがもはや文化的意義やアイデンティティを持った人間ではなくなるという、私たちの存在に対する重大な脅威なのです。私たちは、海岸沿いで見られるような、多くの観光客に賞賛され楽しまれてはいますが実体のない、空っぽの貝になってしまうということなのです”

13

13

日本政府と東京電力に対する強いメッセージ

“この決定は、すべての民主主義国や国連が支持する人権政策の基盤である基本的な人間としての良識に対する攻撃です。日本政府と東京電力は、このような行動を再考し、私たちが共有する地球とそこに住む人々の幸福を守るために不可欠な、責任、敬意、誠実さという価値観を堅持しなければなりません。”

14

14

日本政府と東電に対する強いメッセージ

“私たちは、日本政府と東京電力に対し、この危険な行動を直ちに中止するよう懇願します。

私たちは、日本国民に対し、この抗議行動に参加し、母なる自然の怒りの強さに手を加え、逆らおうとすることがいかに危険であるかを最近示した原子力エネルギーの拡散(福島原発事故のこと—訳者注)に歯止めをかけるよう懇願します！

自然と戦うことは、人間である私たちが決して勝つことのできない戦争であり、間違いなく私たちを破滅へと導くものです。私たちの生活、環境、そして未来は、この戦争の帰趨にかかっているのです。”

15

15

スピーチの概要

海洋投棄の危険性

破滅的かつ不可逆的であり、日本の海洋境界線をはるかに超えて、私たちアジア太平洋地域社会が食料、健康、そして一般的な幸福のために依存しているデリケートな生態系や貴重な資源に影響を及ぼす

海と人格との結びつき

人々の健康や海洋生物、海洋環境の破壊という被害を超えた、海という存在の神聖さや海と人間の結びつき

海との断絶は、北マリアナ諸島の人々にとって文化的な意義やアイデンティティを失うに等しい

日本政府への批判

日本政府及び東電による汚染処理水の海洋投棄は、国際的に共有する資源に対して、多大な影響を及ぼし得るものであるにも関わらず、日本政府は一切資源を共有する他国の意を汲み取る姿勢がない

16

16



1980年代、日本政府は、低レベル放射性廃棄物の海洋投棄に当たって、太平洋諸国の声に耳を傾け、廃棄物の処理を断念したという経緯があったが、今回の海洋投棄において、日本政府には一切太平洋諸国の声を汲み取ろうとの姿勢が見られない。

➡ 今回の海洋投棄に決して無関係ではない、太平洋諸国の声に耳を傾けてほしい

17